

第5章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

平成23年度～26年度の3年間にかけて実施された第6次研究の成果と課題を受け、「卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究」として第7次研究をスタートさせ、今年度で2年目を迎えた。

「課題研究」では、生徒のコミュニケーション能力の課題に向き合うために、生徒同士がお互いに関わりながら学習する「協同学習」の方法を取り入れた授業実践を、全員が授業を公開する「全員授業研究」と、各教科・形態における協同学習の取り入れ方について各授業の担当でチームを作り実践をまとめていく「グループ研究」の二つを連動させる形で取り組んだ。

「寄宿舎の研究」では、生徒の生活に関わる問題に向き合う生活指導の充実を目指して、コミュニケーションに関わる課題を持つ生徒を抽出し、コミュニケーション能力育成に向けた指導法について、グループに分かれて検証した。

「プロジェクト研究」では、「今養版キャリアプランニング・マトリックス（改訂版）」を教育課程と関連付けるため、各教科・形態の全体計画を作成し、その後、各教科・形態の年間指導計画と指導内容表との関連付け、内容の精査を各教科・形態のグループで検討を進めた。

（1）成果

① 協同学習の浸透

課題研究では、授業の計画に生かせるよう協同学習授業マニュアルを作成し、それを基に授業者が指導案を作成し授業を公開するようにした。そして、授業を参観する教員を各学年から最低2名ずつ選出するとともに、授業に対するアンケートを参観者全員に提出してもらった。さらに、授業者は参観者からのアンケートを基に授業の振り返りレポートを作成することで、より細かい視点で自分の実践を振り返ることができた。授業をする側としても、授業を参観する側としても、協同学習の要素を意識する場が多くあったことで、協同学習の5つの要素を取り入れられた授業が大幅に増え、協同学習に対する知識や実践方法について浸透してきたことを感じることもできた。

② 各教科・形態における協同学習の実践

個人で行った協同学習の授業実践について、「国語グループ」「生活単元学習グループ」といったように、各教科・形態の授業担当者同士で普段の授業や全員授業研究時にどのように協同学習の5つの要素を取り入れたかを定期的に話し合う場を設け、各授業での成果と課題についてまとめていく「グループ研究」を行った。その結果、普段の授業とグループで話し合った内容が相互効果を生み、より協同学習を取り入れた授業について深めることができるとともに、各授業の特性を生かした協同学習の各要素を発見することができた。また、本校の教育課程を踏まえた協同学習の実践を積み重ねたことで、今後誰がどの授業を担当したとしても、その授業に適した協同学習の要素を取り入れた授業が計画され、更なる実践が積み重なっていくことを期待している。

③ 指導内容表の整備

「今養版キャリアプランニングマトリックス（改訂版）」と指導内容表を関連付けるため、指導内容の項目をどの学年で指導すべきか各教科・形態に分かれて協議した。その結果、各学年に必要な指導内容についてまとめることができ、キャリアの視点を基に、系統だった指導をするための具体的な指針となるよう指導内容表を整備することができた。各教科・形態において、学年の段階に応じてきめ細やかな指導をすることが期待される。

④ 年間指導計画との連動

指導内容表が整備されたことで、指導内容表と年間指導計画を関連付けるための作業を行った。各学年の年間指導計画に、「この学習を行うときは指導内容表のここと連動させる」というように、各学年段階の指導内容とそれに適した指導内容表の目標を関連付けることができた。これにより、学年の生徒の実態に応じた授業だけでなく、学年段階に必要な学習内容、キャリア発達に適応した授業を計画することができると考えている。

⑤ 生活面におけるコミュニケーションへの意識の向上

卒業生の実態から、より良いコミュニケーションをとることの必要性は、職場だけではなく生活面においても重要ということが明らかとなっている。生活の場である寄宿舎では、生活力の向上に向けてコミュニケーション能力の育成に重点を置いた指導を行ったことで、コミュニケーション面の課題解決とともに、日常生活において行動や周囲を意識する様子などの変化が見られることができた。より良く生活していくためには、人とどのように関わっていくか、自己の発言や行動を振り返ることを意識して活動できるかが大切だということを学校、寄宿舎ともに共通認識を改めて持つことができたと思う。今後は、学舎がそれぞれの指導場面において同じ認識の基、生徒にアプローチをすることで、教育効果を高めることができることを期待している。

（２）課題

① 協同学習の効果的な取り入れ方

課題研究では、各教科・形態のチームで協同学習を取り入れた授業実践について検討を進めたことで、昨年度より更に研究が深まった。しかし、深まったことで出てきた課題として、知識・技能を教える学習と、協同学習を用いてそれらを深める学習のバランスの難しさについて挙げられた。また、協同学習５つの要素を一つの授業で全てを取り入れることが難しいという意見もあった。

今後「主体的・対話的で深い学び」の考え方が教育の主流になることを踏まえ、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう人間性」をどのように育てるか、協同学習の視点で深めていく必要があると考える。

② 評価の充実

昨年度はマトリックスの改訂、今年度は指導内容表・年間指導計画の整備を行うなど、キャリア教育を進める上で必要な計画は整ってきた。そこで、次年度はキャリア教育の全体計画を作成する必要があると考える。そして、次に必要になるのが計画に対しての実践、そして評価である。指導内容表、年間指導計画から個別の指導計画の目標を設定し、それを基に授業を行い、適切に評価するという流れを確立する必要があると考える。授業に関しては課題研究で扱っているため、プロジェクト研究では、「評価」について検証していくことが望ましいと考える。

③ 寄宿舎に関すること

ここ数年、本校生徒が生徒指導事故等の問題を起こしてしまう場合は、学校よりも寄宿舎で起こることが多くなってきている。また、卒業生の実態からも、職場以外でトラブルになることが多い。今年度寄宿舎では、コミュニケーション能力に重点を置いた指導を行い、指導効果として、コミュニケーション能力だけでなく自分の発言や行動を振り返る力においても効果が見られた。そこで、振り返る力は引き続き指導するとともに、振り返る以前の問題として、自分の感情をコントロールする力など、自己管理能力を高める指導について検証することが必要であると考ええる。

④ 教職員の専門性の向上

どの研究でも、より良い授業作りや指導を行うために、更に学び続ける必要がある。職員の専門性の向上に向け、校内学習会の内容を検証するなど研修部として取り組んでいく。

2 次年度に向けて ～第7次研究3年次について～

協同学習について研究を進めていった結果、協同学習は集団作りにおいても個人の成長においても、高い効果が期待できることが改めて分かった。例えば、「互恵的な相互依存関係」や「対面的なやりとり」は、自分がその集団に必要とされていることを感じることができる。また、「個人の責任」や「協同学習スキル」があることで、個人の役割を果たそうと責任を持って努力する姿勢や習慣を作ることができる。そして、「チームのふりかえり」では、集団や個人の思考についても振り返ることで、様々な理論や答えに向かう考え方について学ぶことができる。よって、「協同学習」は、教育・指導の基本だと思えることができる。協同学習は、「主体的・対話的で深い学び」につながる手法の一つでもあるため、次期学習指導要領に向けてという意味でも、次年度も学校として取り組み、さらに深く、より発展的に研究を進めていく必要があると考える。

プロジェクト研究では、次年度にキャリア教育の全体計画を作成することで、本校におけるキャリア教育の枠組みが整うこととなる。そこで、キャリア教育の全体計画、今養版キャリアプランニングマトリックス、年間指導計画、指導内容表と、全体的な計画から日々の授業まで、キャリアの観点で指導にあたることができるが、計画に対しての評価が必要となる。そこで、次期学習指導要領の「育成すべき資質・能力」として「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」

を参考に、本校の教育課程の主軸である「作業学習」と「生活単元学習」において観点別評価を検討していくことで、「何ができるようになるか」に対して具体的な評価を行うことができると期待している。

次年度は、今年度の成果と課題を基に、本校の教育課程に合わせたキャリア教育の形をさらに明確にしていくことが重要だと考える。また、「寄宿舍がある学校」ということで、生活面の指導においても卒後の生活を見通した教育を行うことができるよう、学舎が連携して、生徒や地域の実態、時代の流れに則した教育方針・教育活動を創り上げていくことがより一層求められることになるだろう。